



### 作文3部

## 全国農業協同組合中央会会長賞

# 最後の田んぼと始まる未来

佐賀県佐賀市立城東中学校一年

射手矢 咲子

「最後の田植え、頑張るばい。」

今年の米作りはいつもとは違つたものだつた。私は、近所に住むおじさんの田んぼが大好きだ。毎日の通学路にある、この田んぼのおかげで、季節の移り変わりを感じることができて。小学校の頃の農業体験をきっかけに、私はお米作りに興味を持つようになり、ここ数年は、おじさんの田んぼのお手伝いをしている。お米を収穫するまでは、とても多くの作業が必要だ。おじさんが、

「お米は自分の子供と一緒に。手塩にかけて育てんと、いい味は出ん。」

とおしえてくれたことがある。おじさんは、天候の予測や病害虫の兆候など、小さな変化にもいち早く気づくよう、常にアンテナを張つて見守つている。沢山の愛情を持って育てているからこそこんなにおいしいお米ができるのだと思う。

そんな中、おじさんの田んぼがスマート農業に切り替えるかもしれないという話を聞いた。その瞬間、私は複雑な気持ちになつた。高齢のおじさんが、体力的に楽になる反面、今まで手作業を通じて感じていたおじさんのあたたかさが失われるのではないかどうかと不安になつたからだ。おじさんは

「機械に任せて、美味しいお米ができるはずがない。」

と反対だった。しかし、近年の異常気象で、今までの栽培方法が通用しなくなつていると、家族が説得し、おじさんは、スマート

農業への切り替えを了解した。

そして今年の春、今までのやり方で行う、最後のお米作りがスタートした。私も時間を見つけては田んぼをのぞいた。田植えの日はいつもより一本一本ていねいに苗を植えた。田んぼの中のアメンボとゲンゴロウなどの虫たちにも

「稻を守つてね。」

とお願いした。田植えが終わり、少しいびつな一直線に並んだ苗を見て、おじさんはさみしそうに

「この姿を見るのも、今年で最後か。」

とポツリとつぶやく様子に胸が張りさけそうになつた。

スマート農業は、効率や収穫量の増加を重視する新しい農業の形だそうだ。AI、ドローン、ロボット技術などを組み合わせ、田んぼを管理する。おじさんが、長時間かけていた手作業が、ものの数分で終わるようになるという。導入技術にもよるが、平均三十パーセント以上、ドローンによる農薬散布にいたつては、九十パーセント近くの労力が削減されるそうだ。

しかし、機械を導入するための初期費用が高く、機械を導入してもうまく使いこなさなければならぬ。私は、機械が管理することとおそれまでつちかつてきた経験、勘、そして手間を惜しまず注いできた気持ちが薄れてしまうようで、少し悲しい。でも、今までのやり方の農業と、スマート農業、どちらか一つを選ばなければならないという事ではない。きっと、お米作りに対しても真剣に向き合う姿勢、愛情はこれからも変わらないはずだ。スマート農業は、日々変化していく、現代社会の中で、今後も農業を続けていくための新しい相棒なんだと思う。

おじさんが毎日見守つてきた田んぼは、もうすぐ収穫を迎える。この特別な時間が終わってしまうことがさみしい反面、今年のお米の出来ばえが楽しみだ。

これから、おじさんたちの新たな挑戦が始まる。私も一緒にその挑戦のお手伝いをして、未来をつなげる農業について学び、受けついでいきたい。